

## 小田原城天守事始め ～木造天守への道～

### 第1回 / 第2回 コラム発信

小田原城天守調査研究室 宮本 啓

2018年11月に当会は、小田原城天守調査研究室を立ち上げ、様々な方のご協力をいただきながら日々、研究を行っております。

現在、既存の小田原城天守の研究のまとめや、模型の調査を行っており、その一環で、当研究室の宮本より、小田原城天守の建築的特徴を皆様にご紹介できたく、HPでのコラムの連載を始めました。そしてこの度、お城通信でもお届けすることといたしました。

### 第1回 まずはおさらいから

小田原北条氏初代早雲（伊勢宗瑞）についての研究も進んでいるようですが、以下ではその辺りからの歴史的な変遷は飛ばします。というのも、その当時の天守の様子が見られる詳しい史料がないからです。ですから、時代はグッと下りますが、比較的史料が豊富な江戸中期、宝永年間（18世紀初頭）に再建された“最後の木造天守”について、いろんな背景を探りながら話を進めたいと思います。

現在の天守は、昭和35年（1960）に鉄筋コンクリート造で再建された天守です。復元設計を担当されたのは、戦災などで失われた各地の天守などを含め、日本近世建築史の調査研究や復元、保存などに尽力された建築史家の藤岡通夫博士です。



写真提供:小田原城天守閣

また、平成27年（2016）から翌28年（2017）にかけては耐震改修工事などが行われ、最上階には摩利支天像などを祀っていた空間が木造で復元されました。

## 第2回 天守の「型」について

前回は、本コラムの目的と現在の小田原城天守の復元について簡単におさらいをしてみました。今回は天守の歴史的な成り立ちと現存する木造天守の構造的な特徴をみながら、宝永年間に再建された小田原城天守の実態に少しずつ迫っていきたいと思います。

### 「望楼型」と「層塔型」

天守の「型」は構造方式とも呼ばれ、歴史的な変遷を研究する上でも重要な考え方なのですが、通常は大きく二つに区別されます。

ひとつは「望楼型」とよばれる方式で、2階建てほどの建物の上にそれよりもひと廻り小さい建物をのせた、みなさんご存知の金閣のような構成です。天正年間に信長が建てた「安土城」をモデルに全国に広まったとされる方式です。



「層塔型」とは、五重塔のように同じ平面（屋根）のかたちを上に行くに従って少しずつ小さくしながら積み上げていく方式です。ただし天守の場合には各階に床がありますので、柱と梁による木組みにはそれなりの工夫が必要です。学術的には「望楼型」から「層塔型」へ発展していく過程で柱の建つ位置など構造的な要素が整理されていったと言われています。



では、小田原城天守はどちらの「型」でしょうか…？  
前回のコラムの外観写真をよ〜くご覧ください。正解は「層塔型」です。天守の本丸広場側に出っ張りがついていたたり、登城出入口のある建物が付属していますが、シンプルにみると長方形の平面を少しずつ小さくしながら三つ重ねた構成です。小田原城天守は“層塔型の三重天守”とすることができます。

次回はもう少し詳しく、天守の「型」と実在した天守の規模についてご紹介していきたいと思います。お楽しみに。

写真出典：『日本建築様式史』美術出版社